あのコとL♡V[redacted]る

—あのコとら[redacted]る—

制作・Rファクトリー

――……っ……っ

まどろみの中、生暖かい〝何か〟が

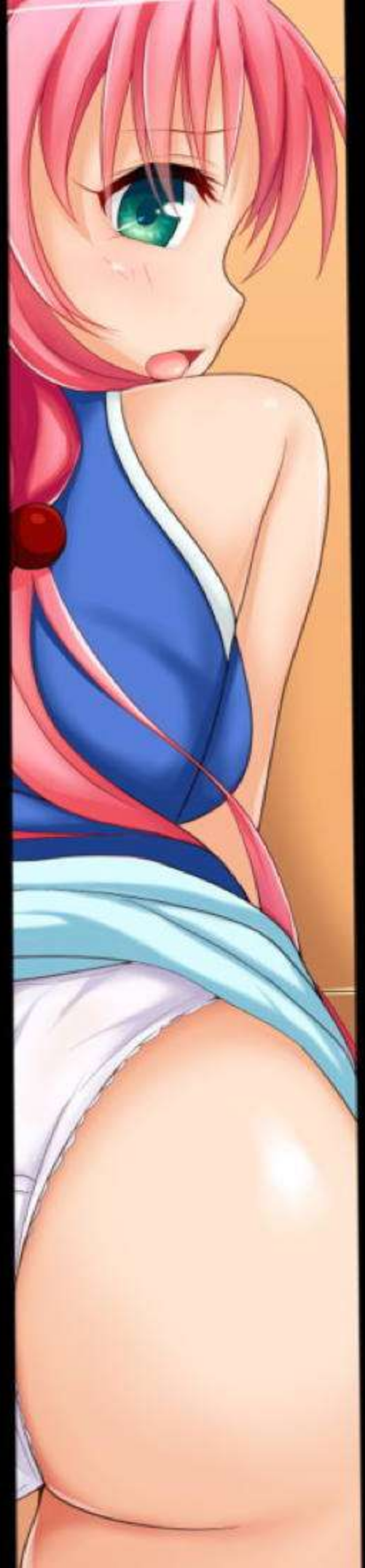
股間周辺を覆い、蠢いている。

徐々に意識が覚醒してくると、ララが

いつも通り〝起こし〟に〝来てくれたんだ

と理解する。

朝一番の射精で目が覚めた。
時計を見ると、いつもより早く起こしに来てくれたみたいだ。
「まだ収まんないや」
そう言うとララが僕の上に乗る。
最初からその気だったみたいだ。



ララが作ってくれた朝食を食べ終わり、
そろそろ身支度する時間だ。

「行く前にしよ？お願っ」
時計の針を見て、顔をしかめるララ。
だけど早くしてね？と、僕にお尻を向ける。

学校にいる間は、ある程度我慢しないといけないので
正直キツイ…
今日は体育の授業があったので、
コソコソしながら用具室に忍び込んだ。
悪いことと分かっているけど、
2人きりになりお互い笑みがこぼれる。

朝はララから誘ってきたが、基本僕の方が
性欲が強い。
どうしても我慢できないから”授業を抜け出し
保健室でエッチ”と目でサインを送り、
先にベットで待つ。
合流すると、む～っとした顔で隣に座った。
(わかってる、わかってるからっこのとーりっ)
合掌しペコペコ平謝りする。
も～っと結局自分から横になり、服を
たくし上げる。

ガラガラガラ———
射精後ややぐったりしてると、他の生徒が数人入ってきた。
流石にお互いあたふたしてしまい、とりあえずベットの中で
静かにやり過ごそうとする。
…が、悪い癖でララをいじめてみたくなり……

保健室から出てからしばらくは怒っていたが、帰宅する頃には
もう機嫌を直してくれたみたいだ。
そして夜に2人でお風呂。
保健室の仕返しっ♪と、ララがおっぱいですっぽり挟んできた。

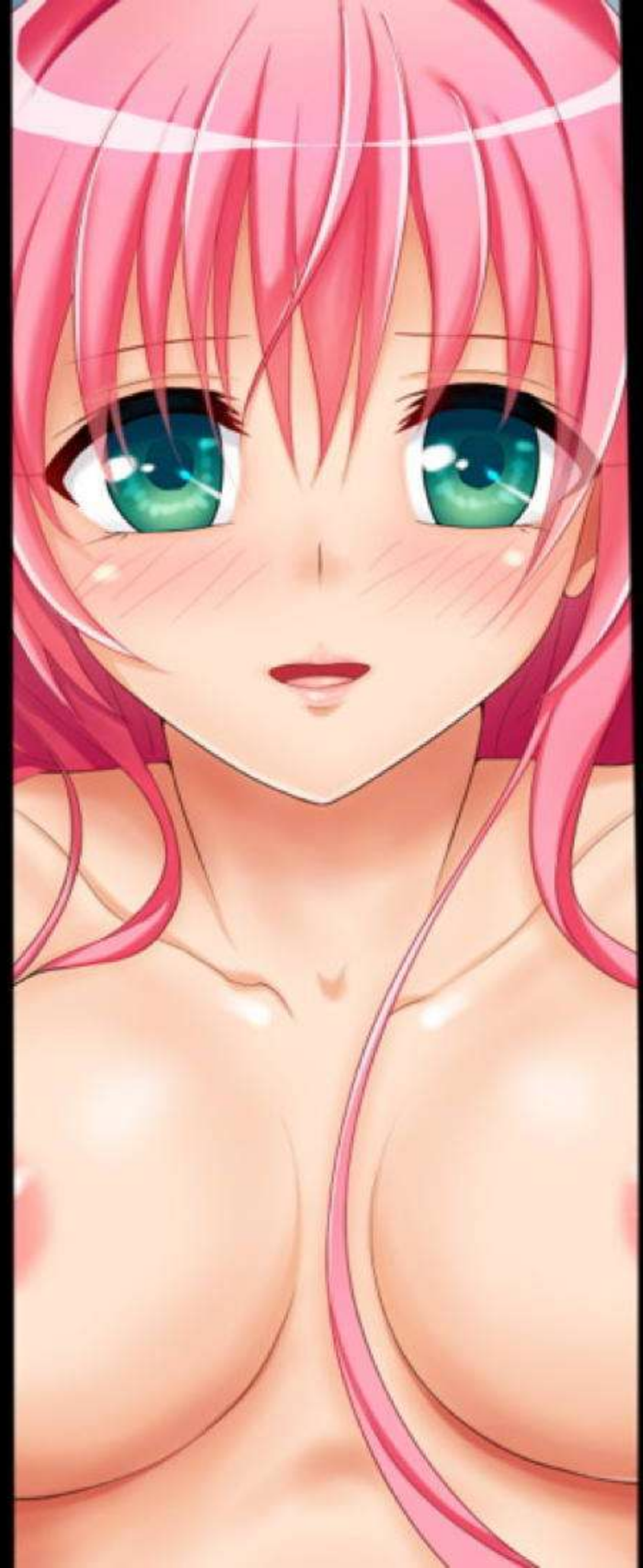
お互いの背中を流しあい、向かい合って湯舟に浸かる。
一日の疲れがお湯に溶けだしていく感覚に、
しばらく会話もなくボーっとしていた。

数分ぼんやりしていると、おっきくなってきたね(笑)と
ララが僕の股間を見て笑っていた。
若干うっとりしてるようにも見える。
ララと見つめ合い、何も言わぬまま自然に行為に入る。

夜も更け、2人裸のまま寝室のベットに寄り添って座る。
無言のまま、蠱惑的な表情で見つめてくるララを抱き寄せ
キスをした。
数秒唇を重ね続けた後、ララが横たわり誘ってくる。
他人に見せることのないしっぽも、僕のことを挑発してる
ように見えた。

はーっ、はーっ…。
少し息が荒くなっているララに、僕から
お願してみる。

むぅ…。
流石にララも、恋人相手でもこの格好で
まじまじ見られるのは恥ずかしそうだ。



『はーっ…も、もう限界っ』
今日一日で何回出したか。
膣に収まりきらず、溢れこぼれる精液を見て
やり切ったようにつぶやく。

そんな僕とは逆に、ララは僕の両手に
指を絡め握り、上気した顔で僕を見上げている。
〝もっとっ欲しいっ…♡〟
その一言で、萎えかけていたモノも
すぐに反り返った。

充分愛し合った後は、もう寝るだけだ。
「あの一言はずるいよぉ(笑)」
最後の一滴までララの膣に注いだ僕は、
脱力気味に笑う。
えへへっ♡
ララも照れながら笑うが、流石に疲れた
のか、すぐに眠気で眼がとろんとしていた。

「おやすみ」
そう言うと、ララが体を横にして僕に
寄り添ってきた。
おやすみ…
限界に達していたのか、すぐにスーッスーッ
と静かに寝息を立て始める。
僕も目を閉じると、すぐに意識が薄れていった。

――……っ……っ

まどろみの中、生暖かい〝何か〟が

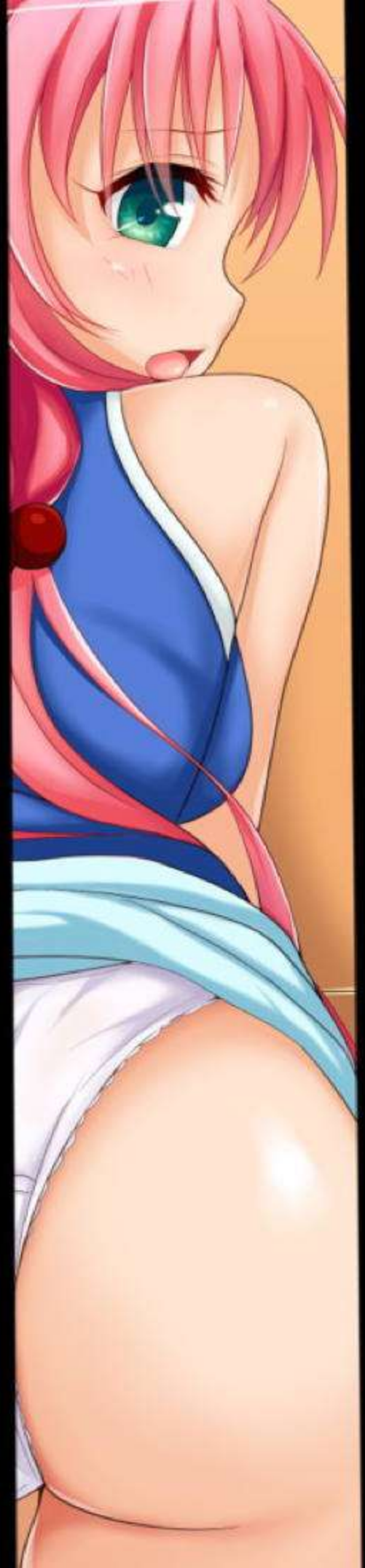
股間周辺を覆い、蠢いている。

徐々に意識が覚醒してくると、ララが

いつも通り〝起こし〟に〝来てくれたんだ

と理解する。

朝一番の射精で目が覚めた。
時計を見ると、いつもより早く起こしに来てくれたみたいだ。
「まだ収まんないや」
そう言うとララが僕の上に乗る。
最初からその気だったみたいだ。



ララが作ってくれた朝食を食べ終わり、
そろそろ身支度する時間だ。

「行く前にしよ？お願っ」
時計の針を見て、顔をしかめるララ。
だけど早くしてね？と、僕にお尻を向ける。

学校にいる間は、ある程度我慢しないといけないので
正直キツイ…
今日は体育の授業があったので、
コソコソしながら用具室に忍び込んだ。
悪いことと分かっているけど、
2人きりになりお互い笑みがこぼれる。

朝はララから誘ってきたが、基本僕の方が
性欲が強い。
どうしても我慢できないから”授業を抜け出し
保健室でエッチ”と目でサインを送り、
先にベットで待つ。
合流すると、む～っとした顔で隣に座った。
(わかってる、わかってるからっこのとーりっ)
合掌しペコペコ平謝りする。
も～っと結局自分から横になり、服を
たくし上げる。

ガラガラガラ———
射精後ややぐったりしてると、他の生徒が数人入ってきた。
流石にお互いあたふたしてしまい、とりあえずベットの中で
静かにやり過ごそうとする。
…が、悪い癖でララをいじめてみたくなり……

保健室から出てからしばらくは怒っていたが、帰宅する頃には
もう機嫌を直してくれたみたいだ。
そして夜に2人でお風呂。
保健室の仕返しっ♪と、ララがおっぱいですっぽり挟んできた。

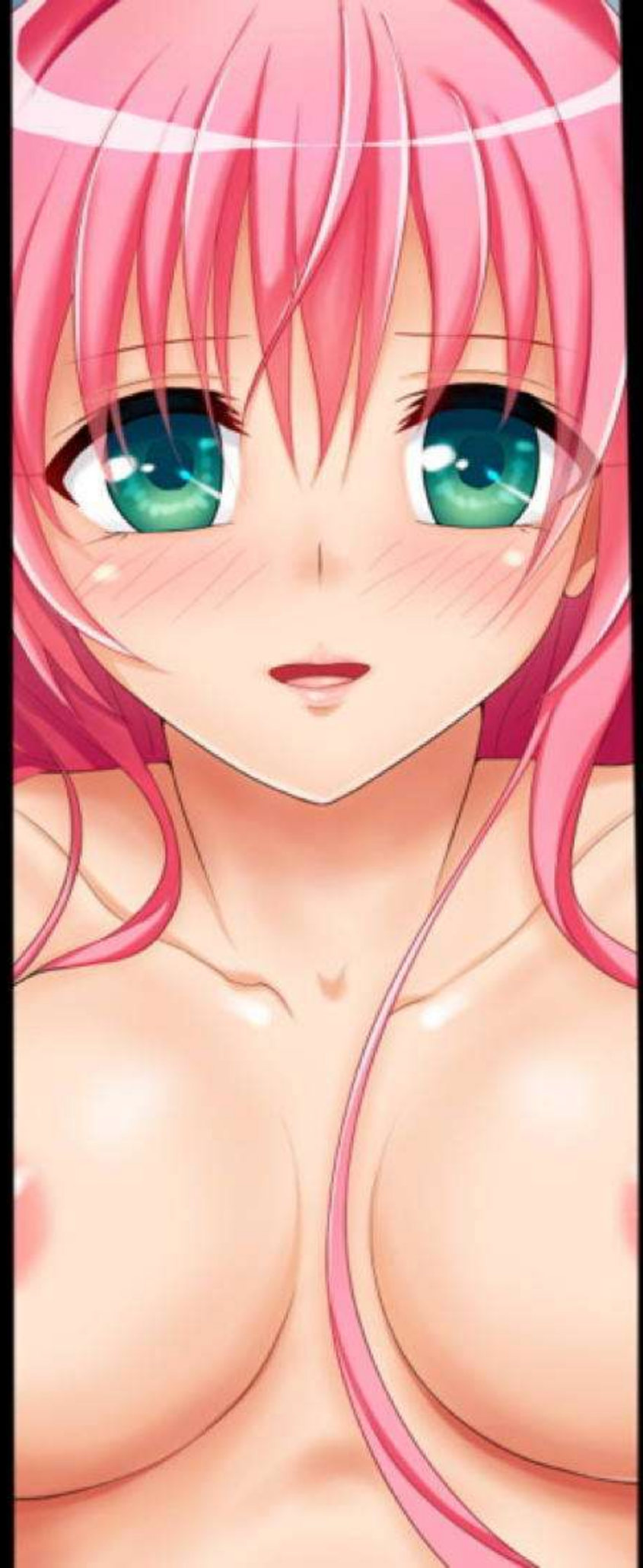
お互いの背中を流しあい、向かい合って湯舟に浸かる。
一日の疲れがお湯に溶けだしていく感覚に、
しばらく会話もなくボーっとしていた。

数分ぼんやりしていると、おっきくなってきたね(笑)と
ララが僕の股間を見て笑っていた。
若干うっとりしてるようにも見える。
ララと見つめ合い、何も言わぬまま自然に行為に入る。

夜も更け、2人裸のまま寝室のベットに寄り添って座る。
無言のまま、蠱惑的な表情で見つめてくるララを抱き寄せ
キスをした。
数秒唇を重ね続けた後、ララが横たわり誘ってくる。
他人に見せることのないしっぽも、僕のことを挑発してる
ように見えた。

はーっ、はーっ…。
少し息が荒くなっているララに、僕から
お願してみる。

むぅ…。
流石にララも、恋人相手でもこの格好で
まじまじ見られるのは恥ずかしそうだ。



『はーっ…も、もう限界っ』
今日一日で何回出したか。
膣に収まりきらず、溢れこぼれる精液を見て
やり切ったようにつぶやく。

そんな僕とは逆に、ララは僕の両手に
指を絡め握り、上気した顔で僕を見上げている。
〝もっとっ欲しいっ…♡〟
その一言で、萎えかけていたモノも
すぐに反り返った。

充分愛し合った後は、もう寝るだけだ。
「あの一言はずるいよぉ(笑)」
最後の一滴までララの膣に注いだ僕は、
脱力気味に笑う。
えへへっ♡
ララも照れながら笑うが、流石に疲れた
のか、すぐに眠気で眼がとろんとしていた。

「おやすみ」
そう言うと、ララが体を横にして僕に
寄り添ってきた。
おやすみ…
限界に達していたのか、すぐにスーッスーッ
と静かに寝息を立て始める。
僕も目を閉じると、すぐに意識が薄れていった。